令和元年度
三郷市版人ロビジョン

令和２年３月

三　郷　市

目　次

Ⅰ　はじめに 1
（1）　趣旨 1
（2）　人口ビジョンの位置づけ 1
（3）　人口ビジョンの対象期間 1

Ⅱ　人口動向の現状分析 2
1. 総人口・世帯数の推移 2
2. 年齢5歳階級別人口の推移 3
3. 人口動態 4
（1）全体の概況 5
（2）自然動態（出生・死亡） 5
（3）社会動態（転入・転出） 7
4. 出生率・女性の年齢別出生率 10
5. 三郷市の特徴に関する分析 11
（1）中央地区の人口動向 11

Ⅲ. 将来人口の推計と分析 12
1. 推計の考え方 12
（1）推計の考え方について 12
（2）推計手法と係数の設定について 14
2. 推計結果 16
（1）全体推計結果 16
（2）第5次三郷市総合計画期間における推計結果 17
（3）推計結果における年齢階層別人口 18
（参考）我が国の人口の推移と長期的な見通し 20

Ⅰ　はじめに

（1） 趣旨

少子高齢社会の進行に的確に対応し、人口減少に歯止めをかけるとともに、将来にわたり活力ある地域社会を維持していくため、近年の急激な人口増加により、現状との乖離が生じた平成 27（2015）年度策定の「三郷市版人口ビジョン[1]（以下、「人口ビジョン」）」を見直し、国の第2期「まち･ひと･しごと創生長期ビジョン[2]」や第2期「まち･ひと･しごと創生総合戦略[3]」等を勘案しつつ、本市における人口の現状と将来の展望を提示するため、新たなビジョンを策定します。

（2） 人口ビジョンの位置づけ

人口ビジョンは、本市における人口の現状を分析するとともに、人口の将来展望を提示、人口に関する市民の認識の共有を目指します。

また、三郷市総合計画、三郷市版総合戦略（以下、「総合戦略」）等の計画策定や、効果的な施策を企画立案する上で、重要な基礎資料として位置づけられます。

（3） 人口ビジョンの対象期間

人口ビジョンの対象期間は、以下の期間とします。

令和 2 年（2020 年）から令和 47 年（2065 年）

（ 45 年間 ）

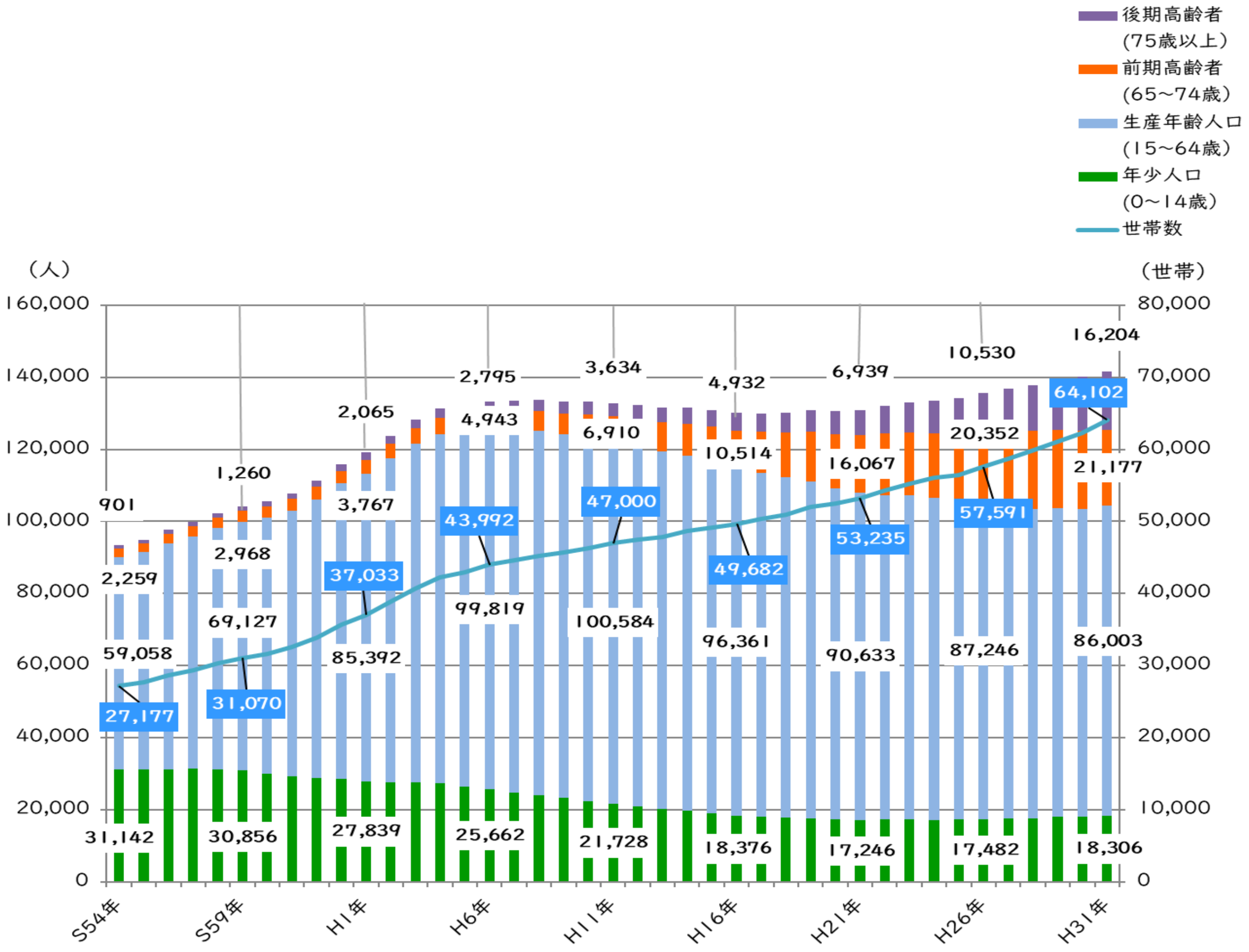
[1] 人口ビジョン･･･三郷市の人口の現状を分析して、将来の人口の展望を示したものです。平成 27 年度に全国のほとんどの地方公共団体が作成しました。
[2] 第2期「まち･ひと･しごと創生長期ビジョン」･･･国において、人口の現状と将来の展望を示したもので、令和元年 12 月に閣議決定がされました。
[3] 第2期「まち･ひと･しごと創生総合戦略」･･･国において、令和元年 12 月に閣議決定されたもので、今後 5 年間の国の施策の方針を示したものです。

Ⅱ　人口動向の現状分析

Ⅰ.総人口・世帯数の推移

- 平成６年までは人口増が続いていましたが、平成７(1995)年から平成 17(2005)年までは人口減少傾向に転じました。
- その後、人口は再度増加傾向となっており、特に平成 27(2015)年以降は人口増加の伸びが大きくなっています。
- 世帯数は、継続的に増加傾向となっています。
- 年齢別では、年少人口が高齢者人口を上回っていましたが、平成 18 年に高齢者人口が年少人口を上回りました。
- 近年では、65 歳から 74 歳までの前期高齢者人口に比して、75 歳以上の後期高齢者人口は増加しています。

◆昭和 54(1974)年から平成 31(2019)年までの総人口・世帯数の推移

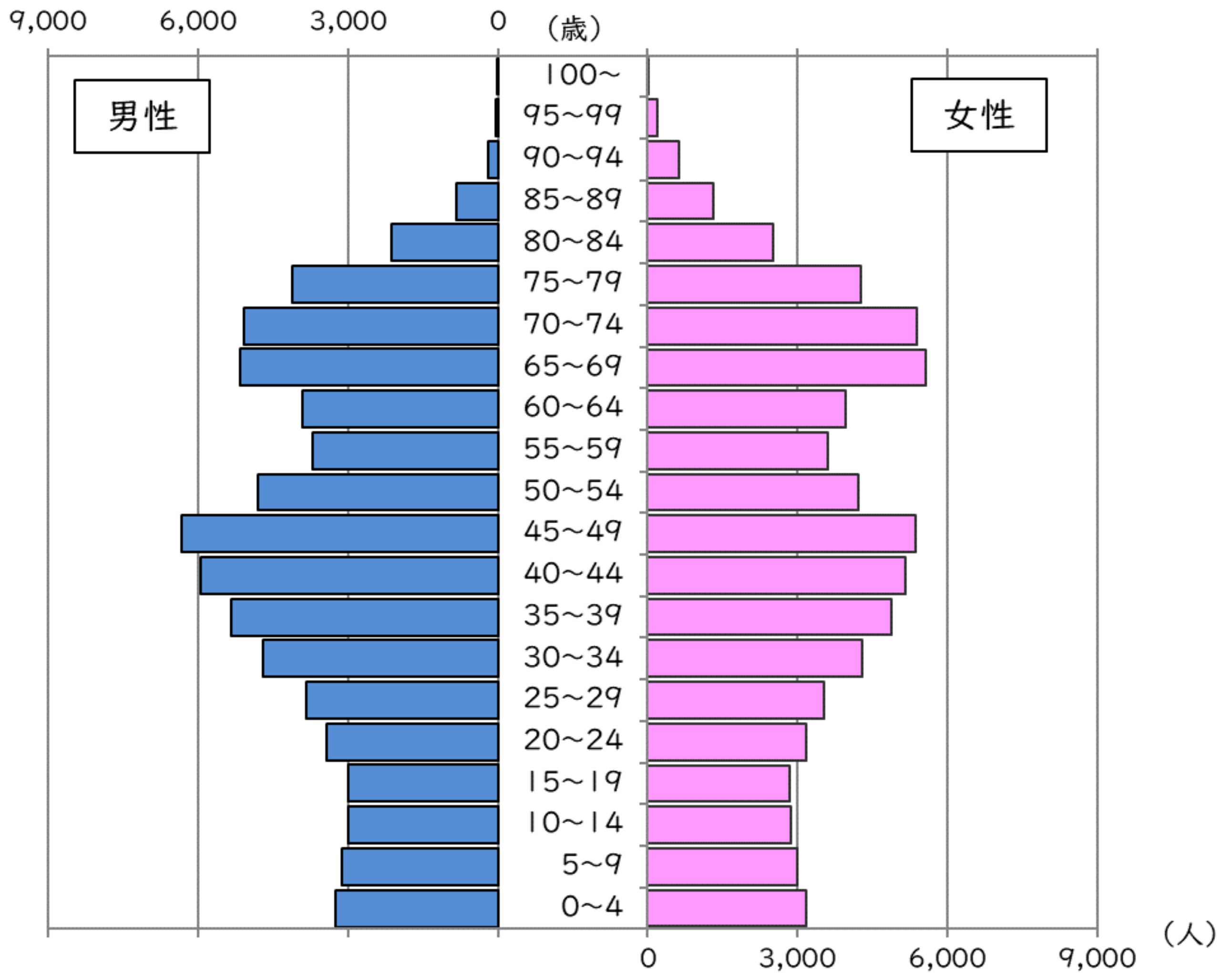


出典：埼玉県、「埼玉県町(丁)字別人口調査」　※各年１月１日の人口データを使用
※平成24年7月まで：住民基本台帳人口+外国人登録人口)
平成24年8月から：住民基本台帳人口(日本人+外国人)

2. 年齢5歳階級別人口の推移

・ 昭和 54(1979)年から、平成 31(2019)年までの人口推移を 10 年ずつ人口ピラミッド[4]で表現すると、昭和 54(1979)年では 30 歳代と0~9歳の人口が多かったのが、時間の経過とともに、最も多い年齢が上がっていく状態となっています。
・ 地区別にみた場合、例えば三郷中央駅周辺の「中央1丁目」と、三郷団地の一部となる「彦成3丁目」では、人口ピラミッド構造が大きく異なるという特徴があります。
・ 「中央1丁目」の人口ピラミッドをみると、昭和 54(1979)年の人口ピラミッドと類似しています。
・ 「彦成3丁目」では 65 歳から 74 歳までの「前期高齢者」の割合が高くなっており、今後 75 歳以上の後期高齢者に移行することが見込まれます。

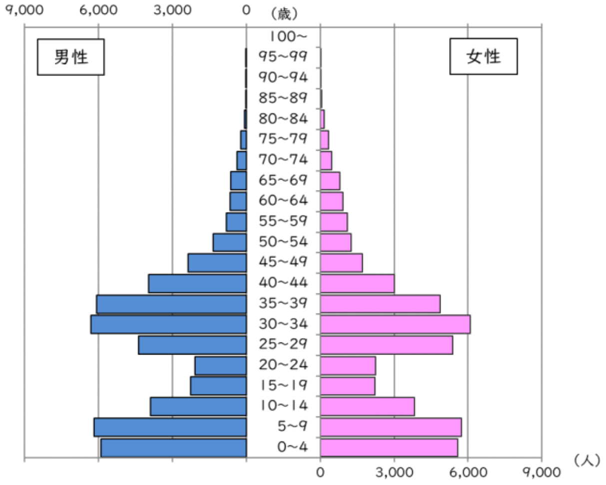
◆三郷市の人口 平成 31(2019)年



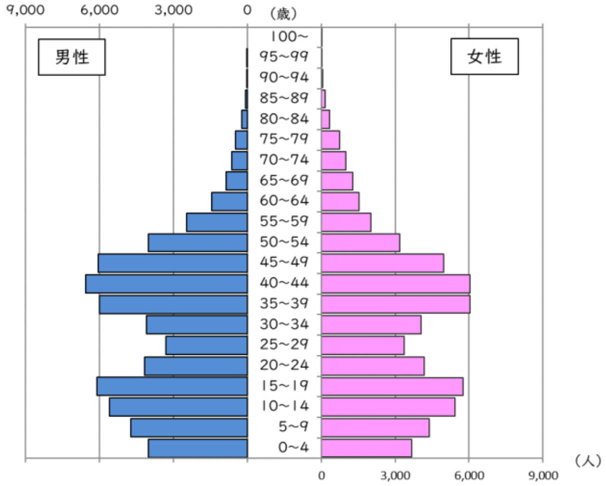
出典:三郷市、「みさと統計書」 ※平成 31 年1月1日人口データを使用

[4] 人口ピラミッド・・・男女別、年齢別で人口の構造を図で示したもので、過去には一般的にピラミッドの形になることが多かったため、この名称となっています。

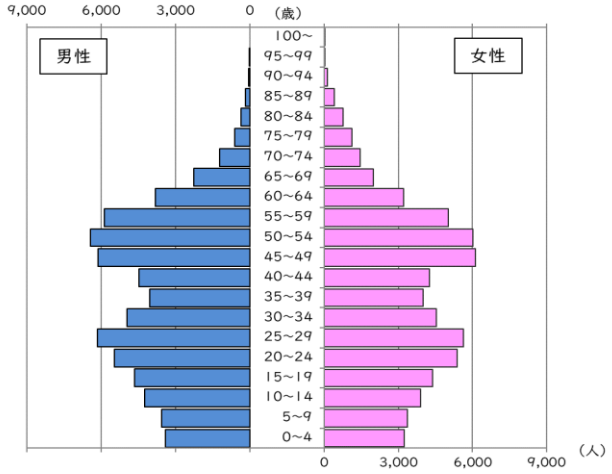
◆三郷市の人口　昭和54（1979）年



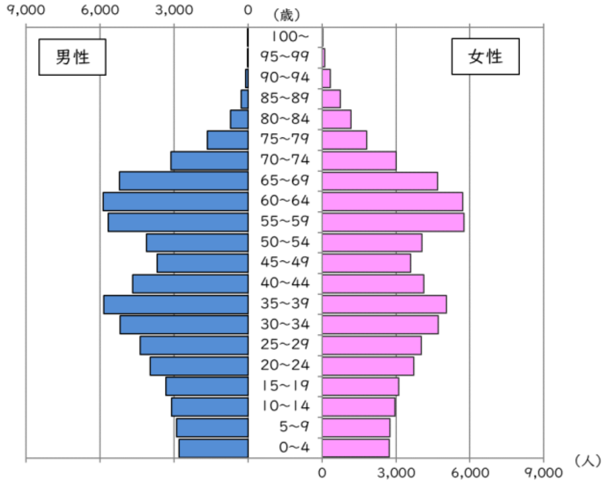
◆三郷市の人口　平成元（1989）年



◆三郷市の人口　平成11（1999）年



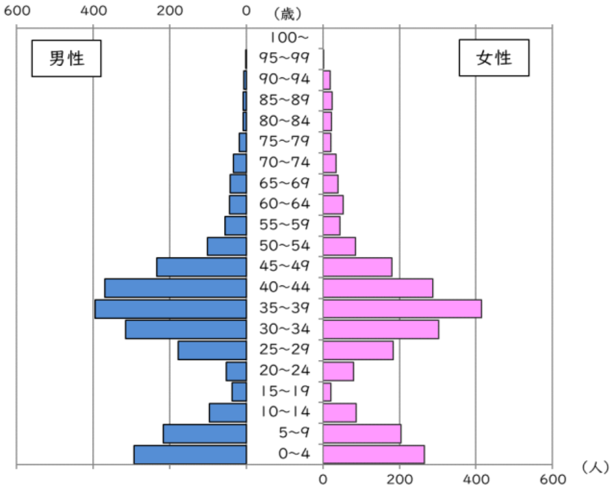
◆三郷市の人口　平成21（2009）年



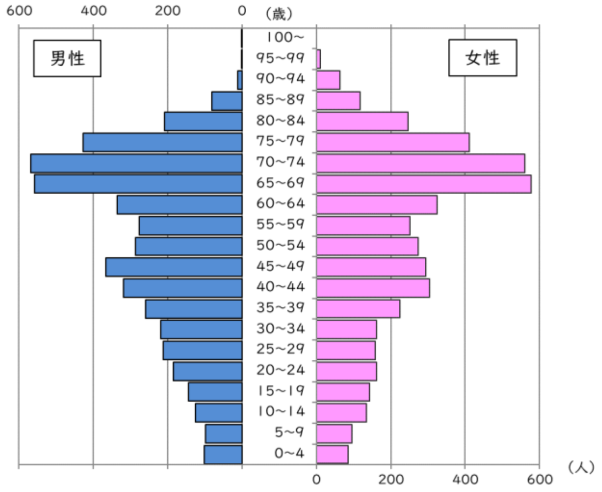
出典：三郷市、「みさと統計書」　※各年1月1日人口データを使用

■地区人口ピラミッド比較/平成31（2019）年

◆中央1丁目（三郷中央駅周辺）



◆彦成3丁目（三郷団地）



出典：三郷市、「みさと統計書」　※各年1月1日人口データを使用

3. 人口動態

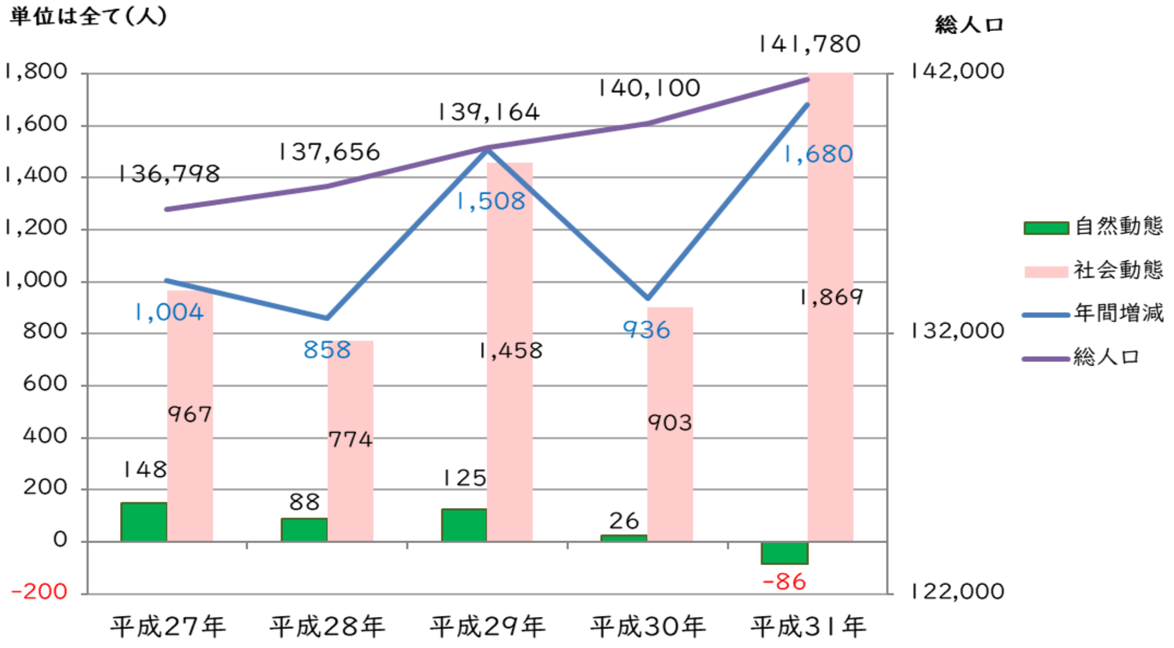
（1）全体の概況

- 近年の人口動態は、自然増（出生者数＞死亡者数）、社会増（転入者数＞転出者数）となっていますが、平成 31（2019）年には自然減（出生者数＜死亡者数）に転じています。
- 自然動態は年により差がありますが、平成 29（2017）年を除けば減少傾向となっています。
- 社会動態では毎年 700 人以上の転入増となっています。

◆人口動態　　（人）

			平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年
年間増減			1,004	858	1,508	936	1,680
	自然動態		148	88	125	26	-86
		出生	1,207	1,214	1,212	1,172	1,189
		死亡	1,059	1,126	1,087	1,146	1,275
	社会動態		967	774	1,458	903	1,869
		転入	6,408	6,460	6,831	6,714	7,951
		転出	5,441	5,686	5,373	5,811	6,082
	その他※		-111	-4	-75	7	-103
		増加	189	168	139	185	176
		減少	300	172	214	178	279

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年
総人口	136,798	137,656	139,164	140,100	141,780

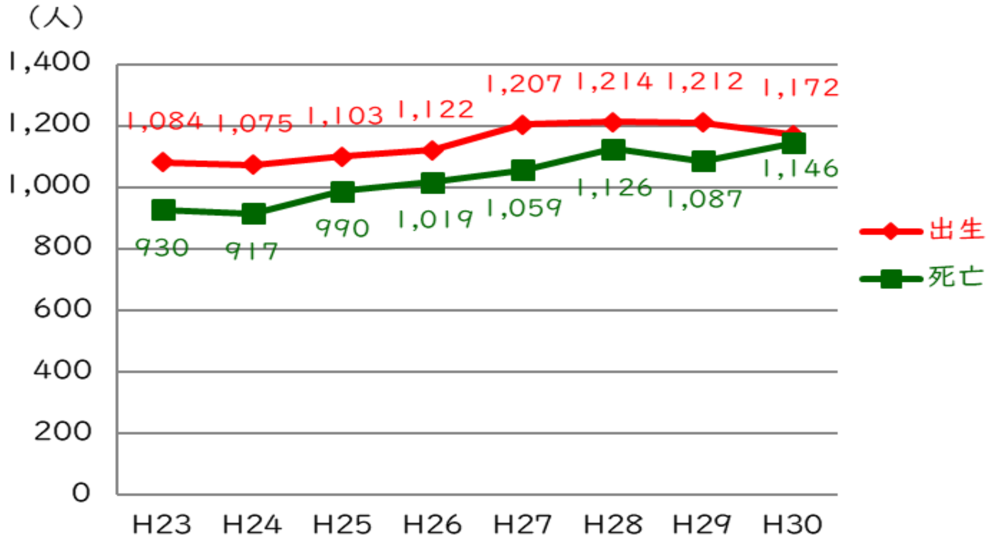


出典：三郷市、「みさと統計書」　※各年1月1日人口データを使用

※その他は住民基本台帳の記録漏れ又は誤記等を知った際の職権による住民票の記載、消除または修正による増減、外国人の帰化や国外からの転入による増、国籍喪失による減等、純粋に移動に含められないものを指す。

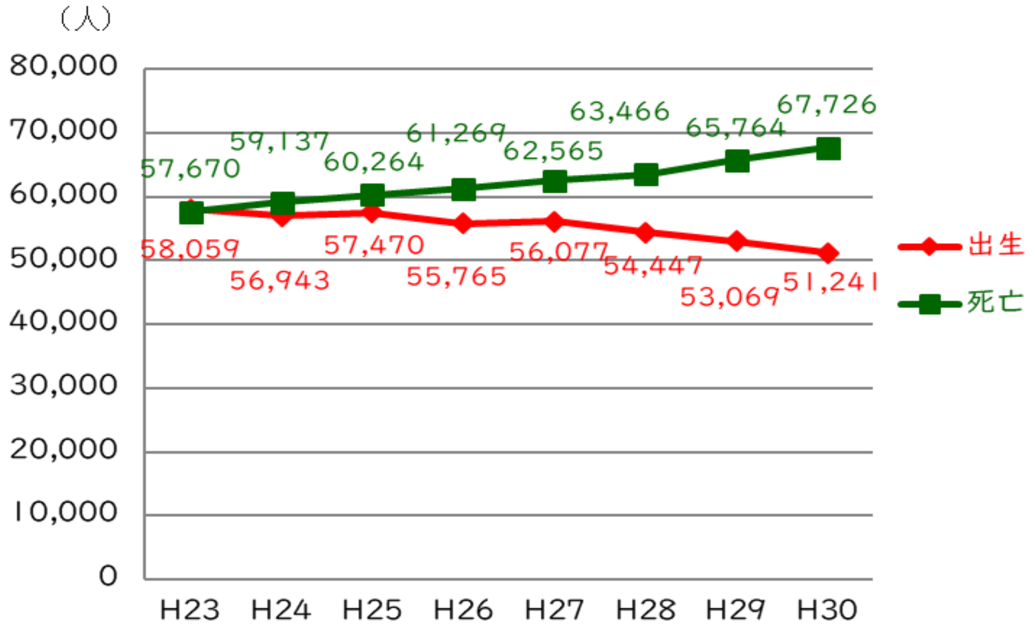
・　人口の自然動態は、従来は「出生」が「死亡」を上回っていましたが、高齢化の進展による死亡者数の増加と、出生者数が平成 28（2016）年をピークに減少傾向に転じたことで、平成 30（2018)年に死亡者数が出生者数に近づいています。将来的に死亡者数が出生者数を上回ることが見込まれます。
・　埼玉県全体では、平成 24（2012）年で「死亡」が「出生」を上回っています。また、出生者数は減少傾向、死亡者数は増加傾向となっています。

◆自然動態



出典：三郷市、「みさと統計書」　※各年1月1日～12 月 31 日の累計データを使用

◆（参考）埼玉県全体



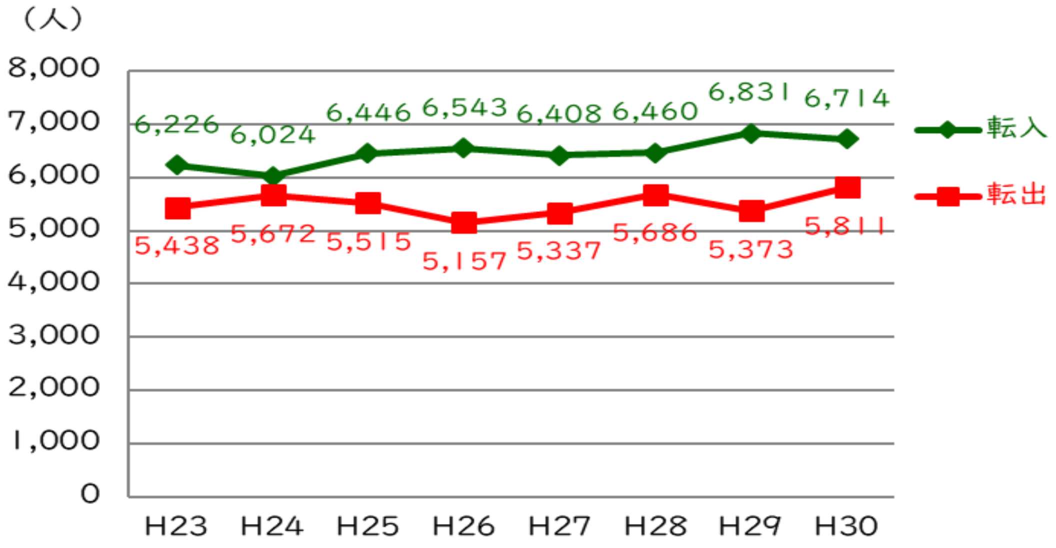
出典：厚生労働省、「人口動態統計」　※各年1月1日～12 月 31 日の累計

（3）社会動態（転入・転出）

① 概況

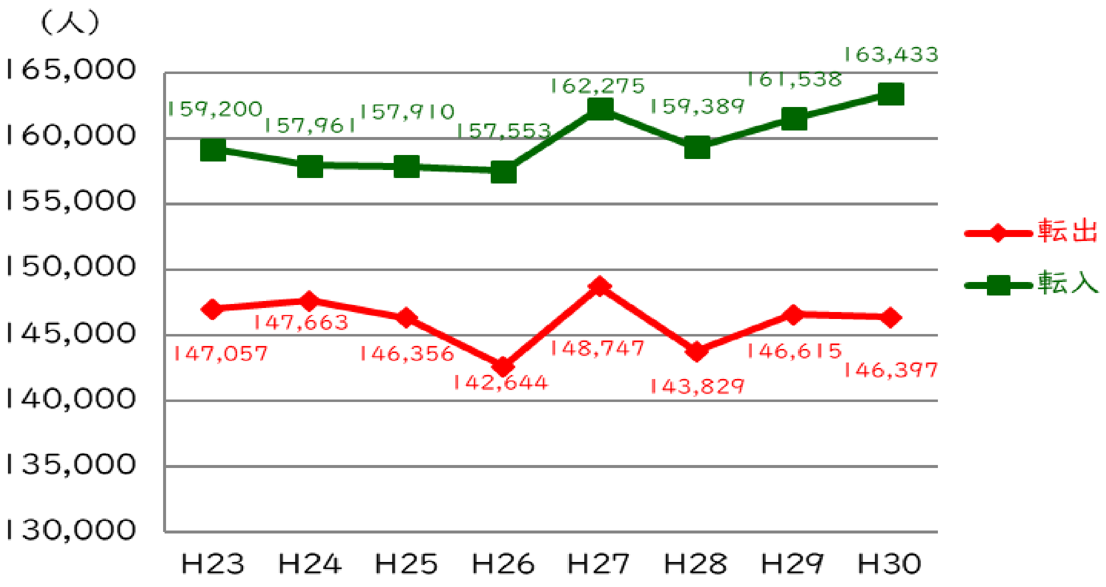
・ 人口の社会動態は、転入超過の傾向が続いており、平成 30（2018）年では約 900 人の転入超過となっています。

◆社会動態



出典：三郷市、「みさと統計書」　※各年1月1日～12 月 31 日の累計データを使用

◆（参考）埼玉県全体

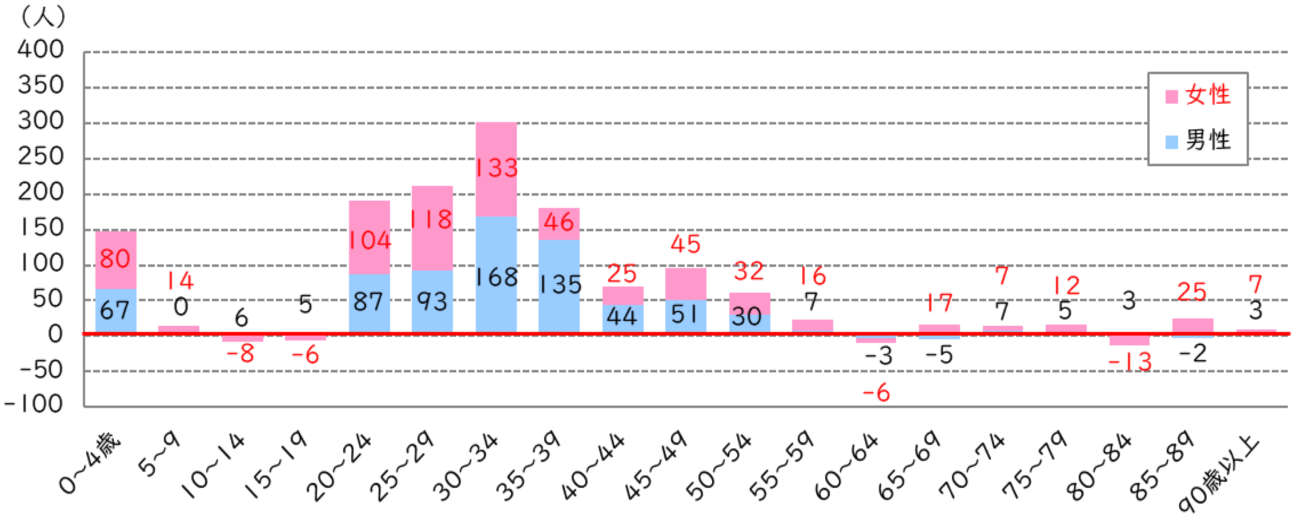


出典：総務省、「住民基本台帳移動報告」　※各年1月1日～12 月 31 日の累計
※各年日本人のみの移動
※住民基本台帳移動報告の5歳階級別転入超過者数のデータは、平成 30 年より、日本人と外国籍市民人口を合計した数もあわせて公表するようになったが、平成 29 年以前は日本人の移動のみの掲載である。
同条件での比較を行うため、日本人のみの統計を掲載。

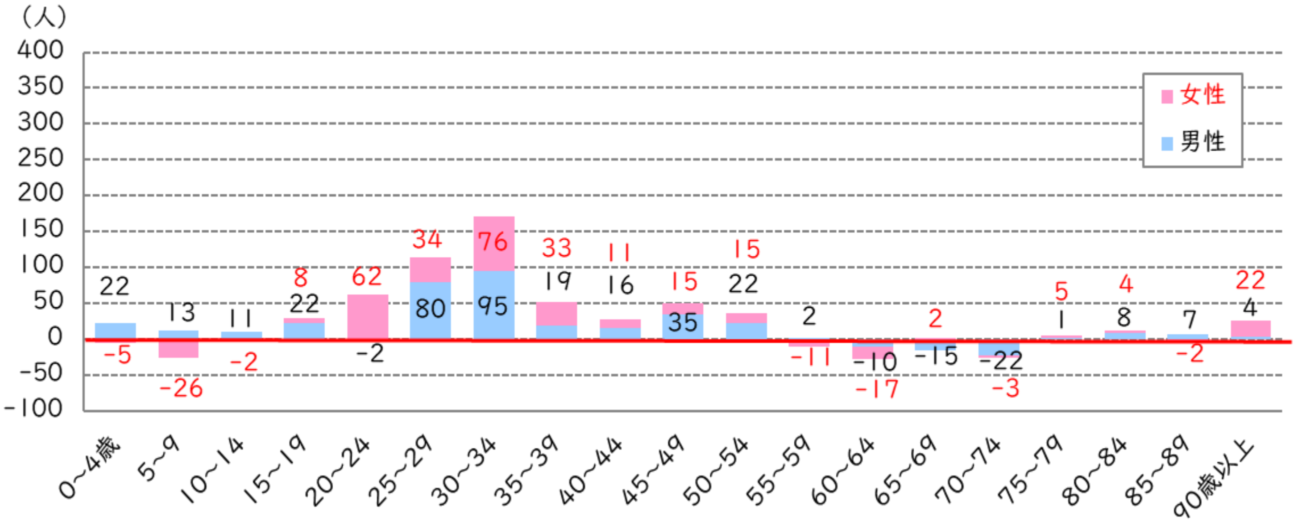
② 年齢別での傾向

- 人口の社会動態を年齢別でみると、平成 30（2018）年では、0～4 歳及び 20～39 歳が転入超過となっています。
- 平成 27（2015）年と比較すると、転入超過者数が大幅に増加しており、この 3 年間で若い世代の本市への転入が進んだことがわかります。

◆年齢別転入者数、転出者数との差（平成 30 年）



◆(参考)年齢別転入者数、転出者数との差（平成 27 年）

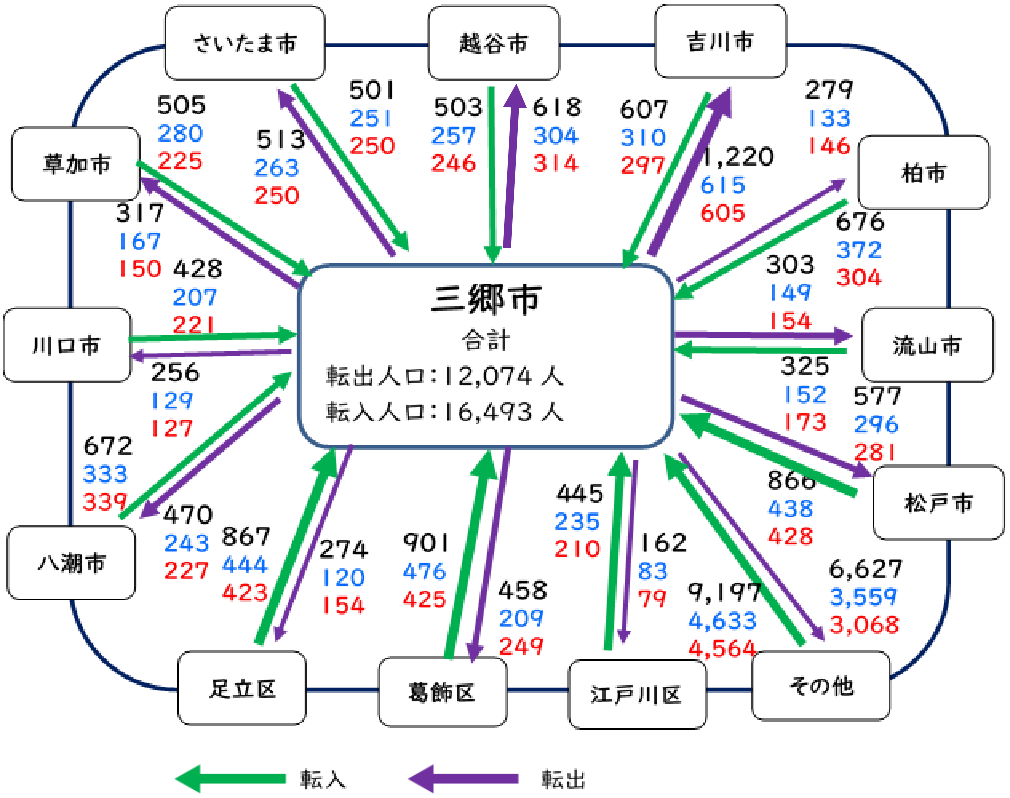


出典：総務省、「住民基本台帳移動報告」　※各年 1 月 1 日～12 月 31 日の累計
※各年日本人のみの移動
※住民基本台帳移動報告の5歳階級別転入超過者数のデータは、平成 30 年より、日本人と外国籍市民人口を合計した数もあわせて公表するようになったが、平成 29 年以前は日本人の移動のみの掲載である。
同条件での比較を行うため、日本人のみの統計を掲載。

③ 転入元、転出先

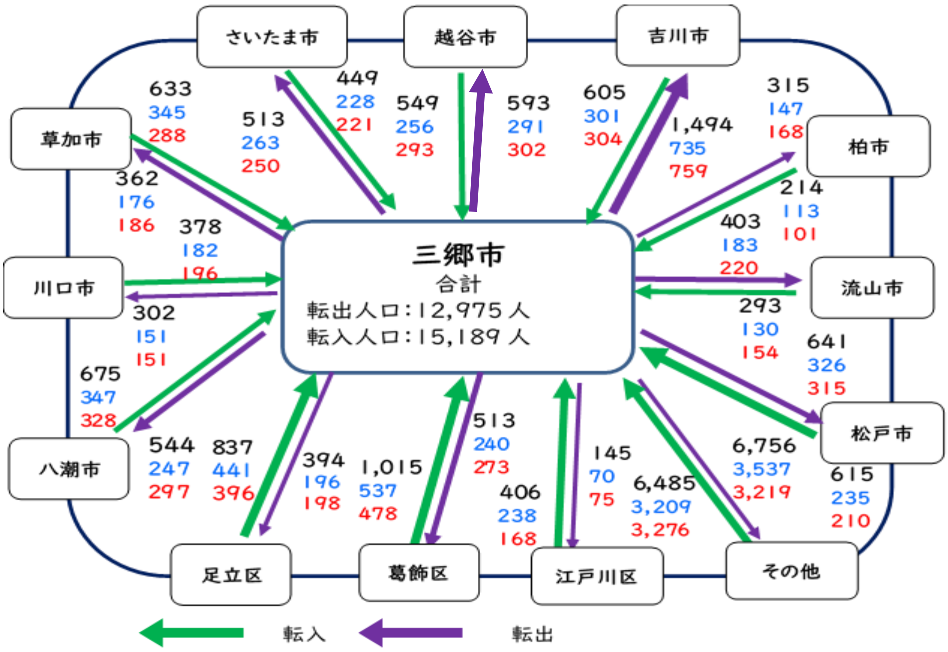
- 近年三郷市では、転入超過となっており、人口の流動が大きくなっています。
- 平成 27（2015）年では、葛飾区、足立区、松戸市からの転入が多くなっています。
- 一方、人口の流出は、吉川市、越谷市が多くなっています。

◆平成 27（2015）年 直近 5 年間における圏域での転入・転出



出典：総務省、2015、「国勢調査」 ※市区町村との比較、黒字が総数、青字が男性、赤字が女性

◆（参考）平成 22（2010）年 直近 5 年間における圏域での転入・転出

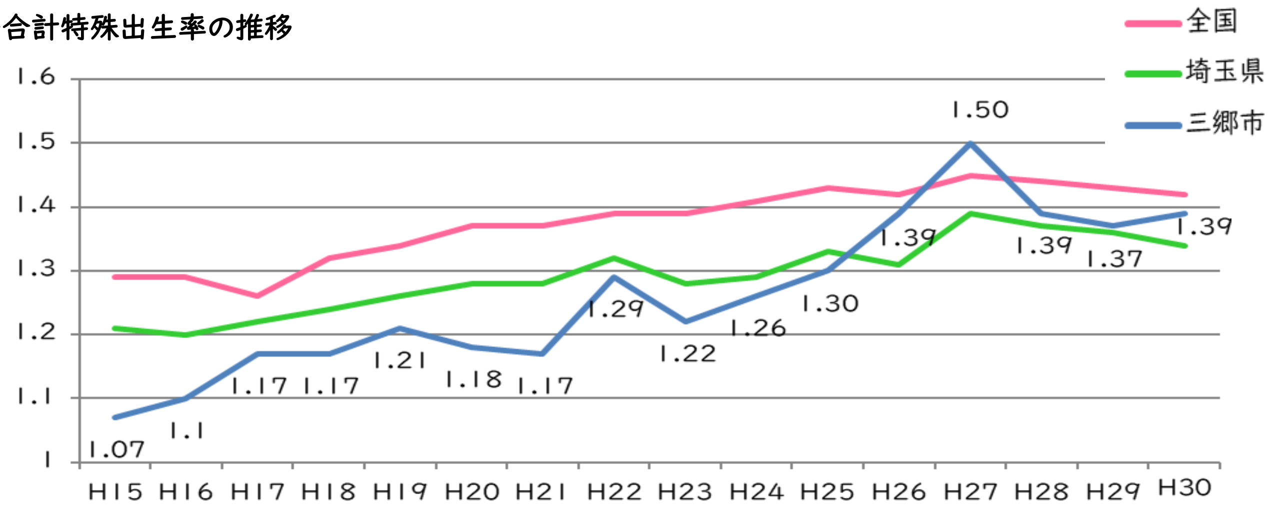


出典：総務省、2010、「国勢調査」 ※市区町村との比較、黒字が総数、青字が男性、赤字が女性

4. 出生率・女性の年齢別出生率

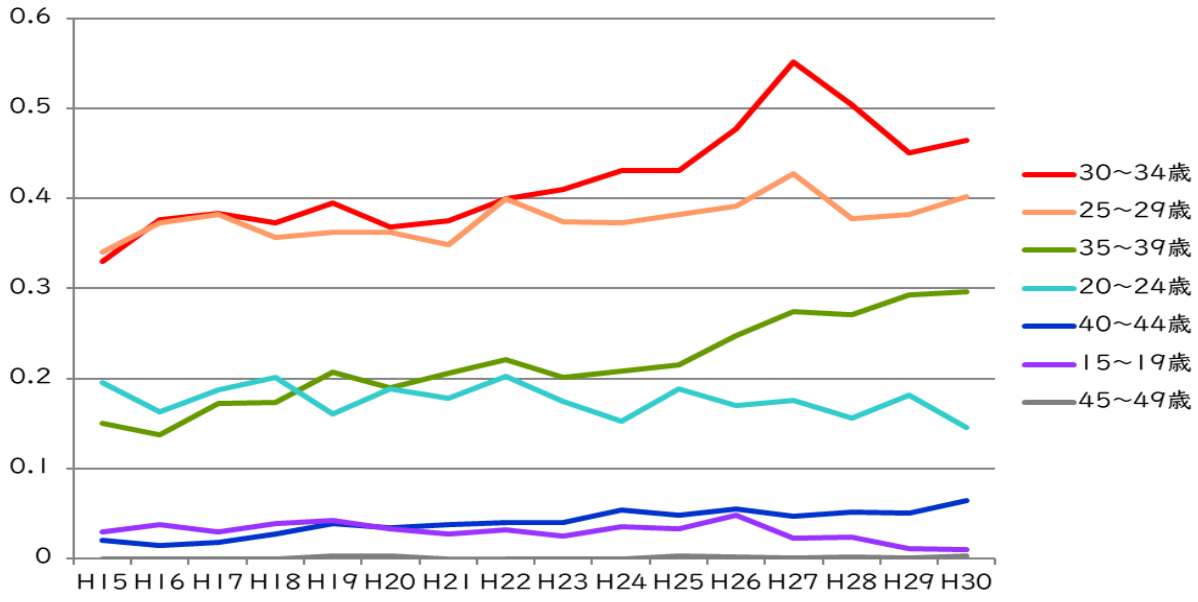
- 本市では合計特殊出生率が上昇しており、平成 30（2018）年では 1.39 と埼玉県平均を上回っています。
- 年別での出生率[5]をみると、いずれの年でも 30～34 歳が最も多く、次いで 25～29 歳の順となっています。
- 近年では、35～39 歳の出生率が上昇傾向となっています。

◆合計特殊出生率の推移



	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
三郷市	1.07	1.10	1.17	1.17	1.21	1.18	1.17	1.29	1.22	1.26	1.30	1.39	1.50	1.39	1.37	1.39
埼玉県	1.21	1.20	1.22	1.24	1.26	1.28	1.28	1.32	1.28	1.29	1.33	1.31	1.39	1.37	1.36	1.34
全国	1.29	1.29	1.26	1.32	1.34	1.37	1.37	1.39	1.39	1.41	1.43	1.42	1.45	1.44	1.43	1.42

◆年齢別出生率の推移



出典：厚生労働省、「人口動態統計」 ※各年1月1日～12 月 31 日の累計

[5] 出生率・・・ある年齢階層の女性が、5年間の間に子どもを産む人数を示したもの。

5. 三郷市の特徴に関する分析

(1)中央地区の人口動向

- 中央地区の人口動向をみると、平成28(2016)年から平成31(2019)年まで4ヶ年で、人口が4千人以上増加しています。これは市全体の人口増加数と比較すると、平成29年以降は、中央地区を除いた市全体の人口増加数より中央地区の人口増加数が上回っています。
- 理由として、マンション開発等が進み、そこに定住する人が増加したことなどが考えられます。

◆中央地区の人口動向

(人)

	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年
中央1丁目	3,718	4,043	4,327	4,883
中央2丁目	1,329	1,478	1,726	1,955
中央3丁目	1,579	1,772	1,882	1,978
中央4丁目	556	979	1,334	1,589
中央5丁目	1,191	1,463	1,632	2,411
合計	8,373	9,735	10,901	12,816

出典:三郷市、「みさと統計書」 ※各年1月1日人口データを使用

◆市全体の人口増加数と、中央地区の人口増加数

(人)

	市全体の人口増加数	中央地区の人口増加数
H28→H29	1,508	1,362
H29→H30	936	1,166
H30→H31	1,590	1,915

出典:三郷市、「みさと統計書」 ※各年1月1日人口データを使用

Ⅲ．将来人口の推計と分析

Ⅰ．推計の考え方

（Ⅰ）推計の考え方について

本市の将来の人口推計を行うにあたり、平成 27（2015）年に三郷市で策定した「人口ビジョン」との連続性に考慮しながら、社会情勢の変化に適切に対応した人口推計とするため、

パターン1 「目標とする人口推移」

パターン2 「現状に準拠する人口推移」

の2つのパターンを推計しました。

パターン1：「目標とする人口推移」

市外からの人口誘導施策が適切に機能することで、三郷中央駅周辺及びインターA地区で開発人口を見込む

- 合計特殊出生率は、平成 29（2017）年において、本市の周辺で最も合計特殊出生率が高い自治体の 1.58 を令和 12（2030）年から令和 47（2065）年まで適用しています。
- 令和 2（2020）年は本市の平成29年（2017）年、平成30年（2018）年の直近2か年の平均である 1.38 を適用し、令和 3（2021）以降は段階的に向上するものとして設定しています。
- 三郷中央駅周辺（以下：中央地区と表記）は、開発人口を 3,920 人見込んだ上で、令和5（2023）年までは社会移動率を抑え、その後は中央地区を除く市全体の移動率を適用しています。
- 開発が進んでいるインターA地区については、現在の用途地域の状況や、集合住宅の建設状況を勘案し、令和 12（2030）年まで封鎖推計（社会移動を0とした推計）を行った上で、開発人口を 1,700 人加算しています。

パターン2：「現状に準拠する人口推移」

開発人口は三郷中央駅周辺を見込み、合計特殊出生率も現状に近い数値で推移する

- 合計特殊出生率は、過去の平均である 1.35 を固定して適用しています。
- 中央地区は、令和 12（2030）年までは封鎖推計を行い、その後は中央地区を除く市全体の移動率を適用しています。
- 本推計では、インターA地区の開発人口は見込まないものとしています。

表 推計条件のまとめ

	合計特殊出生率		中央地区開発	インターA地区開発
目標とする人口推移	令和２（2020）年 令和３（2021）年 令和４（2022）年 令和５（2023）年 令和６（2024）年 令和７（2025）年 令和８（2026）年 令和９（2027）年 令和10（2028）年 令和11（2029）年 令和12（2030）年	1.38 1.40 1.42 1.44 1.46 1.48 1.50 1.52 1.54 1.56 1.58	令和5（2023）年までは、社会移動率を抑え、その後は中央地区を除く市全体の移動率を適用、開発人口は3,920人	令和12（2030）年まで封鎖推計を行った上で、開発人口を1,700人加算
現状に準拠する人口推移	各年とも1.35		令和 12（2030）年まで封鎖推計 その後、開発人口は3,920人	なし

表 開発人口の設定（目標とする人口推移）

（人）

	令和2（2020）年	令和3（2021）年	令和4（2022）年	令和5（2023）年	令和6（2024）年	令和7（2025）年	令和8（2026）年	令和9（2027）年	令和10（2028）年	令和11（2029）年	令和12（2030）年	合計
中央地区	600	450	430	430	380	380	250	250	250	250	250	3,920
インターA地区	155	155	155	155	155	155	155	155	155	155	155	1,705
合計	755	605	585	585	535	535	405	405	405	405	405	5,625

表 開発人口の設定（現状に準拠する人口推移）

（人）

	令和2（2020）年	令和3（2021）年	令和4（2022）年	令和5（2023）年	令和6（2024）年	令和7（2025）年	令和8（2026）年	令和9（2027）年	令和10（2028）年	令和11（2029）年	令和12（2030）年	合計
中央地区	600	450	430	430	380	380	250	250	250	250	250	3,920
合計	600	450	430	430	380	380	250	250	250	250	250	3,920

＊インターチェンジ周辺や駅周辺等において市のまちづくりの進展に伴い、更なる人口増加の可能性が見込まれますが、推計作成時点（令和元年8月時点）においては推計には含めておりません

（2）推計手法と係数の設定について

人口推計を行うにあたり、推計手法と係数については以下のように設定します。

① 推計手法
　コーホート要因法を用いて推計します。
② 使用データ
　住民基本台帳を基としたみさと統計書のデータを使用します。
③ 生残率
　平成 29（2017）年に国立社会保障・人口問題研究所で示された本市の生残率を使用します。
④ 出生率
　5歳階級別の国全体の出生率を基本として、本市と国全体との合計特殊出生率の違いに応じて補正します。
⑤ 移動率
　平成 31（2019）年1月と平成 28（2016）年1月の実績値をもとに、封鎖推計（出生，死亡のみで社会移動を考慮しない推計）を行い、実際の人口と比較して移動率を算出します。
⑥ 条件補正
　中央地区およびインターA 地区の移動率に関して封鎖推計（出生，死亡のみで社会移動を考慮しない推計）あるいは開発以外の人口増の数値を抑え、それに開発人口を加算する手法を用います。

【推計手法と係数についての詳細】

① コーホート要因法

コーホート要因法とは、該当年の人口をもとに、将来に向かって、加齢、出生、死亡、移動（転出入）の要素を算定し、将来推計を行う方法です。

現在の人口を基準として、一定年以降の人口を、生残率（ここでは1年後に生き残る比率）、移動率（転入、転出の状況設定をする比率）、出生率等の設定により計算する方法であり、本市の人口推計においてはこの手法を用います。

なお、人口推計にあたっては、1年単位と5年単位で推計する方法がありますが、本市においては人口の変動が顕著な1年単位の推計を用い市内 91 町丁目別に推計しました。

② 使用データ

平成31（2019）年1月と平成 28（2016）年1月の住民基本台帳人口の男女別・年齢別1歳階級別データを使用しています。

③ 生残率

生残率は、「次年あるいは5年後に生き残る人」の割合です。

国立社会保障・人口問題研究所で発行した「都道府県別将来推計人口平成 29（2017）年」の中で位置づけられている本市の生残率を使用しています。

なお、今回使用した「生残率」は、「次年に生き残る人」の割合を用います。

④ 出生率

出生率について、通常は国立社会保障・人口問題研究所が自治体ごとに示す「子ども女性比」を利用します。

しかし、子ども女性比は、15～49 歳の女性の人口がほぼ同数の場合には有効な手法ですが、本市の 15～49 歳の女性の人口は地区により大きく異なるため、全ての年齢で一律の比率を乗じて子どもの人数を算出すると、実際の出生数とは異なる推計になることが予測されます。

そのため、今回の出生率の推計にあたっては、「5歳階級別に出生率を設定」して、将来の子どもの人数を設定しています。

合計特殊出生率については、「15～49 歳までの女性の年齢別出生率を合計したもの」で、一人の女性がその年齢別出生率で一生の間に産むとしたときの子どもの数に相当します。

算定方法は2種類ありますが、本推計では、1年間における各年齢（15～49 歳）の女性の出生率を合計したものです。

⑤ 移動率

移動率は、平成 29（2017）年に国立社会保障・人口問題研究所で示された本市の移動率は用いず、平成 28 年1月の人口をもとに、社会移動を0とした「封鎖人口推計」で、平成 31（2019）年1月の値を求めた上で、実際の人口と比較して移動率を求めています。

⑥ 条件補正

移動率に関しては上記において設定を行いますが、中央地区は、近年の人口増加が著しく、通常の推計手法で計算すると、将来人口が実情と乖離するなど、不自然な推計結果になります。

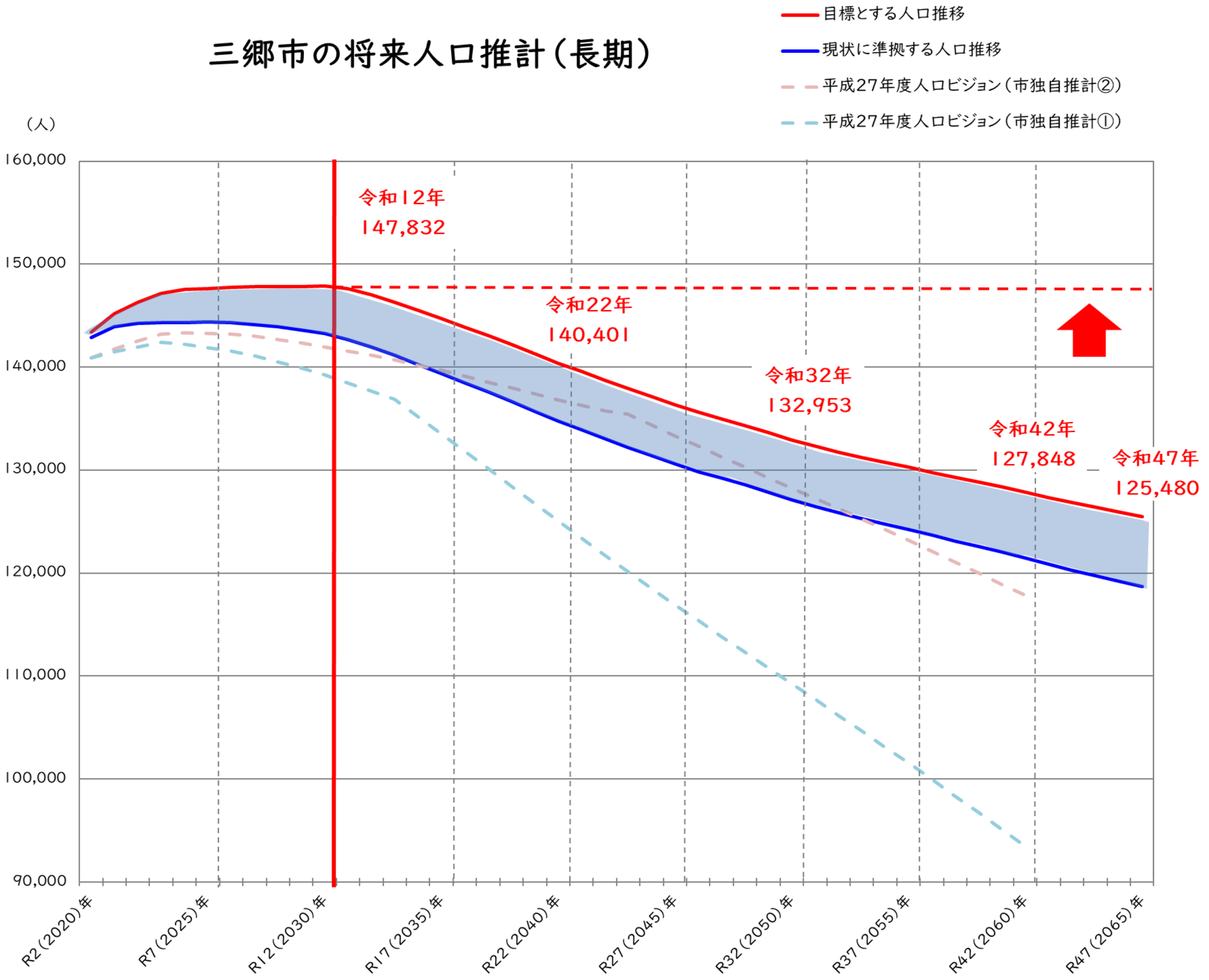
近年の本市の人口動態を適切に反映し、より正確な人口推計を行うため、社会移動については、令和 12（2030）年までは封鎖推計（社会移動を0とした推計）をした上で、開発人口のみ加算します。

- 今後特に人口増が予測される区域の開発人口を位置づけました。
- 中央地区は、この数年間のマンション建設により、空き地等は少なくなっているものの、既存の空き地や、既存工場等の撤退等により今後も新規マンション等の立地が発生すると予測されます。
- インターA地区についても、すでに事業は完了し、人口も増加傾向となっていますが、現状では計画人口に対して、実際の人口が下回るため、引き続き開発人口を見込みました。

2. 推 計 結 果

(1)全体推計結果

- 本市の将来人口を推計すると、平成27年度三郷市版人口ビジョンと比較し、この 5 年間で若い世代が多く本市に転入してきたこともあり、おおむね前回推計を上回ります。
- 「目標とする人口推移」「現状に準拠する人口推移」共に、ピークの年は異なるものの、いずれも今後 10 年前後まで人口が増加し、以降、減少傾向に転じることが予測されます。



各年1月1日基準

(参考)国立社会保障・人口問題研究所(以下「社人研」)における本市の将来人口推計

✧ 社人研では、平成 29 年に都道府県の将来人口(市町村の将来人口推計)を推計していますが、令和元(2019)年時点で、1,200 人ほど人口が下回っており、既に現状と乖離していることから、社人研の推計人口は上記のグラフには未掲載としています。

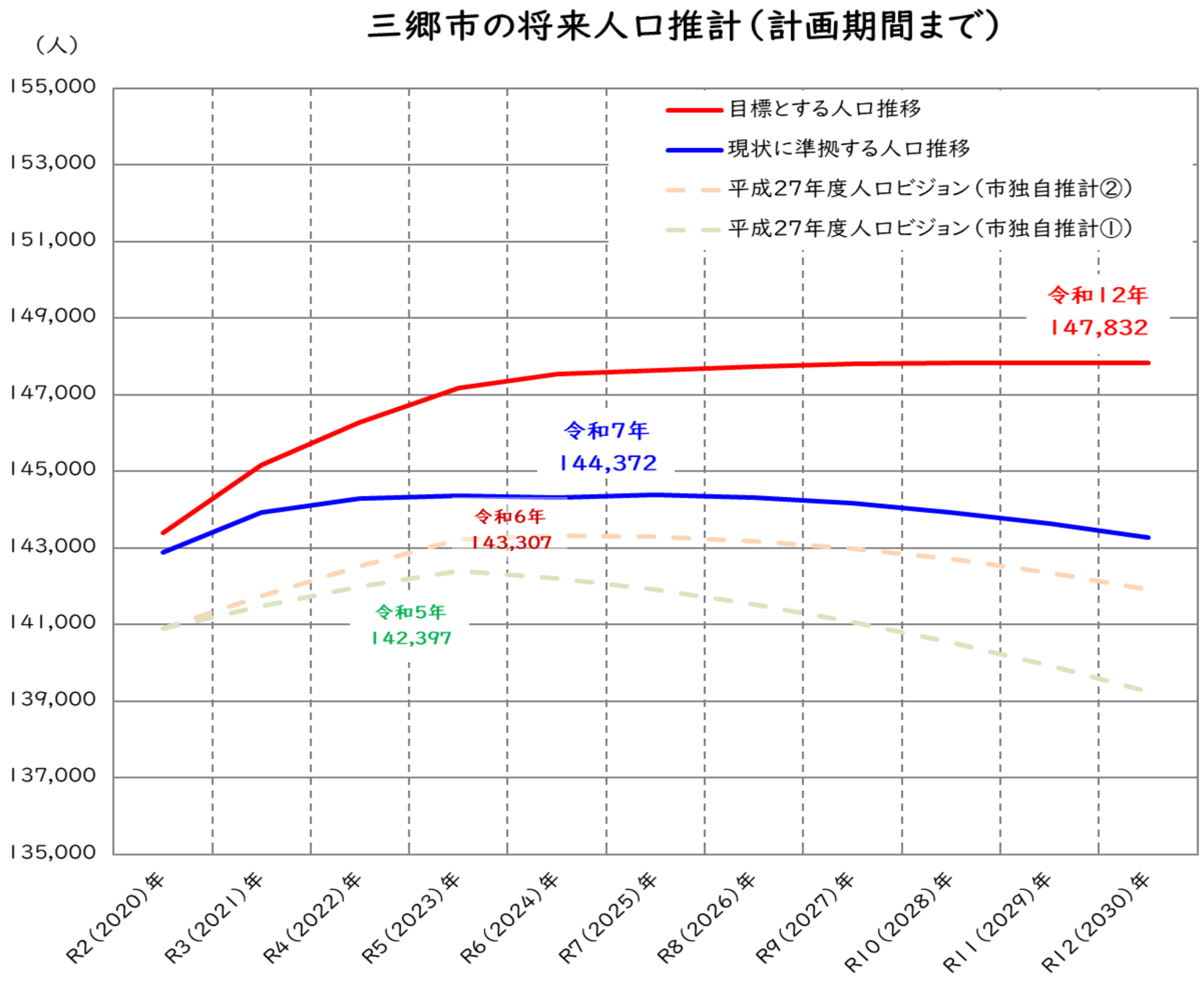
（2）令和12（2030）年までの推計結果

〈目標とする人口推移〉

・「目標とする人口推移」については人口増加が続き、ピークを迎えるのは令和12（2030）年となっています。

〈現状に準拠する人口推移〉

・「現状に準拠する人口推移」については、ピークを迎えるのは令和7（2025）年となっています。



	令和2（2020）年	令和3（2021）年	令和4（2022）年	令和5（2023）年	令和6（2024）年	令和7（2025）年	令和8（2026）年	令和9（2027）年	令和10（2028）年	令和11（2029）年	令和12（2030）年
目標とする人口推移	143,380	145,147	146,275	147,163	147,534	147,637	147,738	147,801	147,826	147,831	147,832
現状に準拠する人口推移	142,878	143,923	144,280	144,350	144,321	144,372	144,317	144,155	143,923	143,626	143,256
平成27年度人口ビジョン（市独自推計②）	140,894	141,743	142,524	143,227	143,307	143,290	143,179	142,982	142,703	142,348	141,920
平成27年度人口ビジョン（市独自推計①）	140,894	141,479	141,980	142,397	142,198	141,906	141,527	141,065	140,526	139,913	139,232

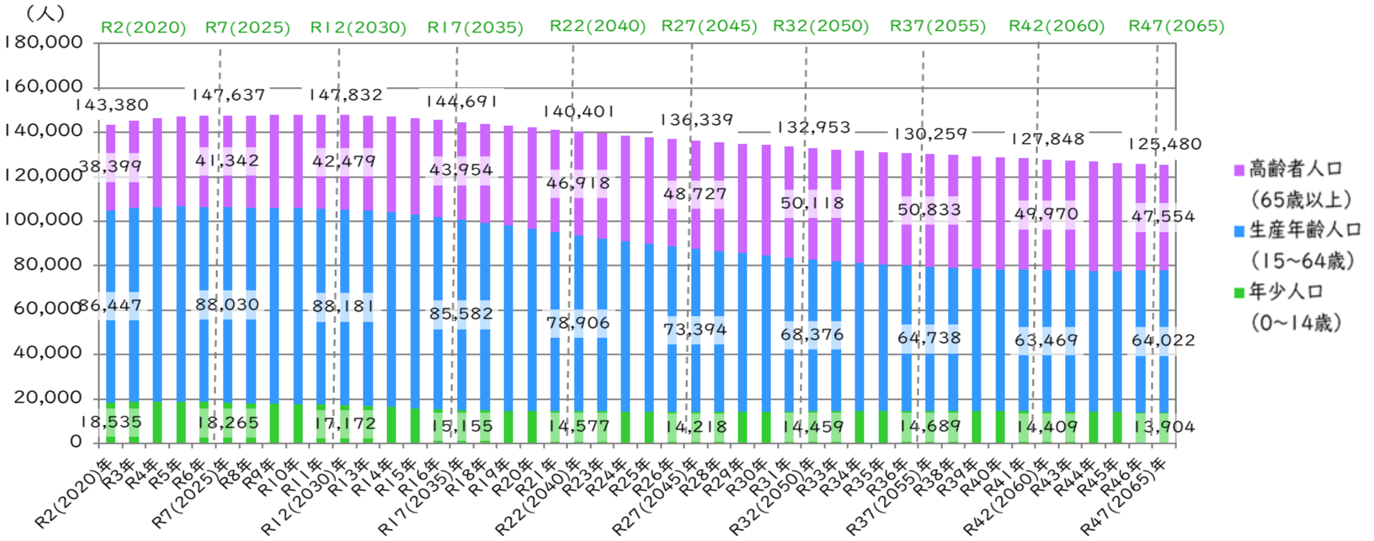
各年1月1日基準

(3) 推計結果における年齢階層別人口

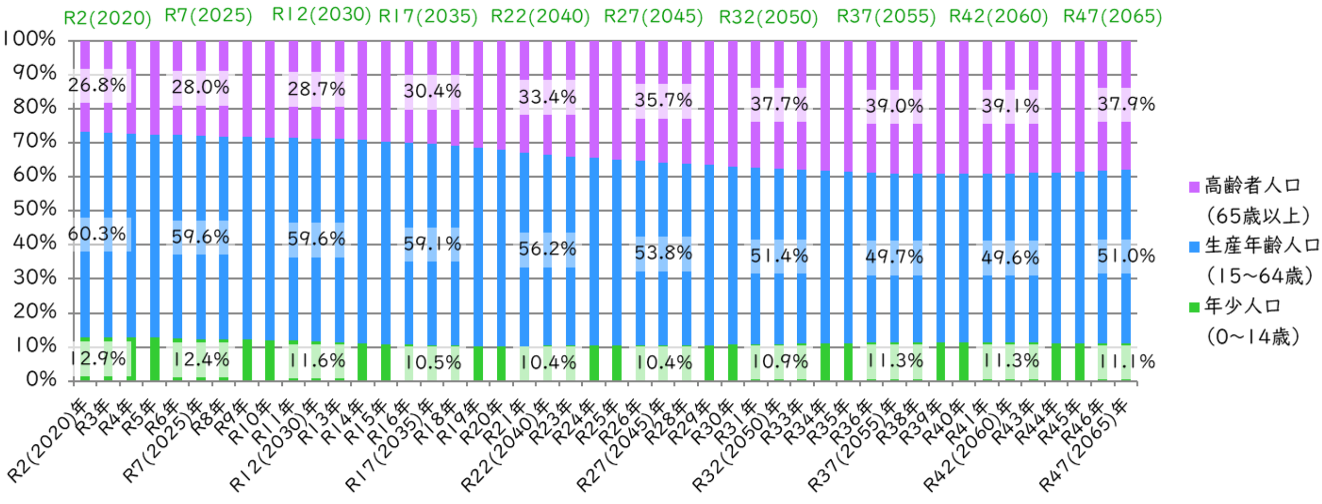
パターン1 「目標とする人口推移」における年齢階層別結果

- 年少人口比率については、令和元年では 13.0%となります。今後一度低下しますが、合計特殊出生率が改善される見込みで推計を行っているため、令和 28(2046)年から再度上昇することが見込まれます。
- 生産年齢人口比率については、令和元年では 60.7%ですが、令和 42(2060)年以降上昇していくことが予測されます。
- 高齢者人口比率については、令和元年では 26.4%ですが、少しずつ高齢化が進み、35%を超えることが見込まれます。

◆人口の推移と今後の予測



人口推計(目標とする人口推移)



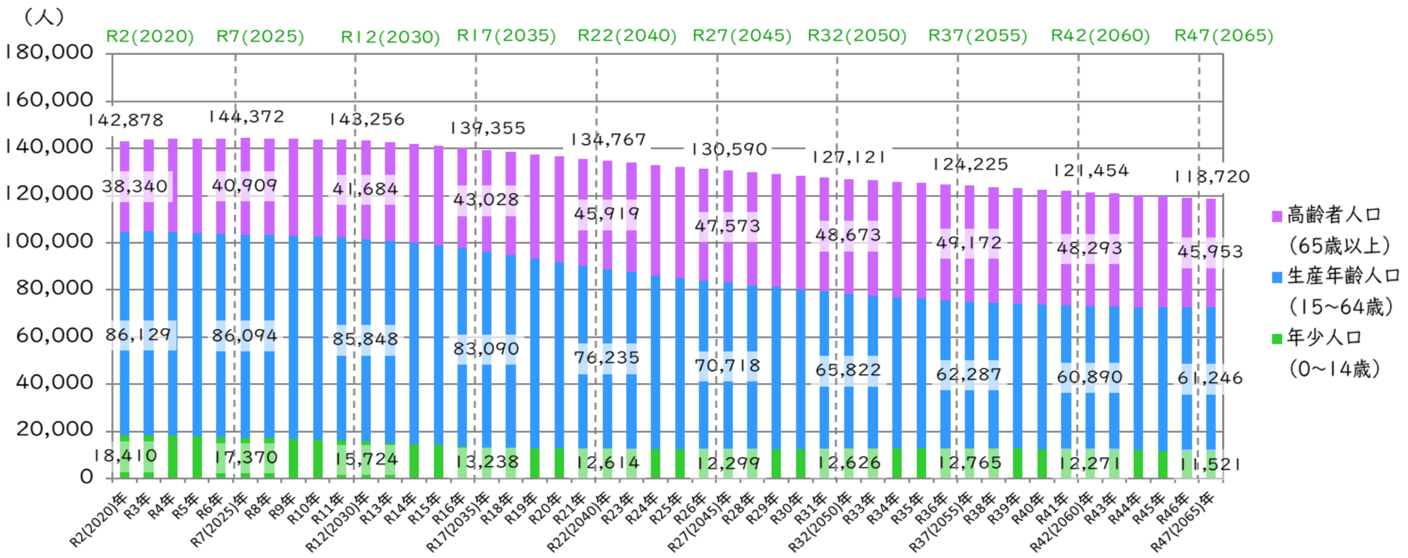
年齢別構成比(目標とする人口推移)

出典:三郷市、「みさと統計書」 ※各年1月1日人口データを使用

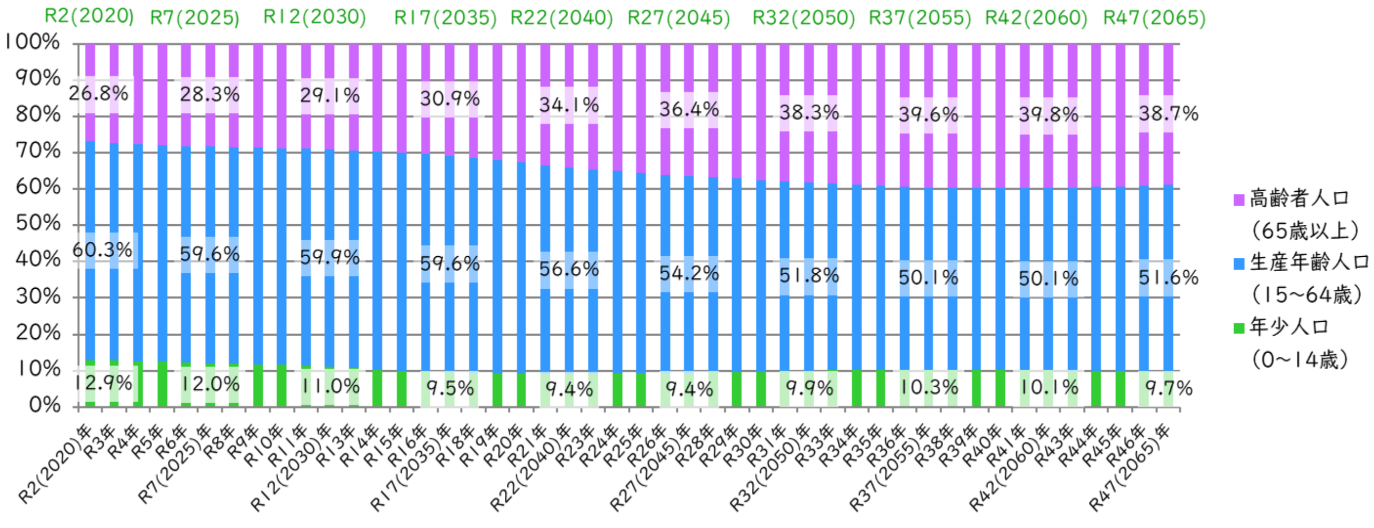
パターン2 「現状に準拠する人口推移」における年齢階層別結果

- 年少人口比率については、令和元年では 13.0%となります。今後一度低下しますが、令和 27（2045）年から再度上昇することが見込まれます。
- 生産年齢人口比率については、令和元年では 60.7%ですが、令和 43（2061）年以降上昇していくことが予測されます。
- 高齢者人口比率については、令和元年では 26.4%ですが、少しずつ高齢化が進み、一時的に 40%に近づくことが見込まれます。

◆人口の推移と今後の予測



人口推計（現状に準拠する人口推移）



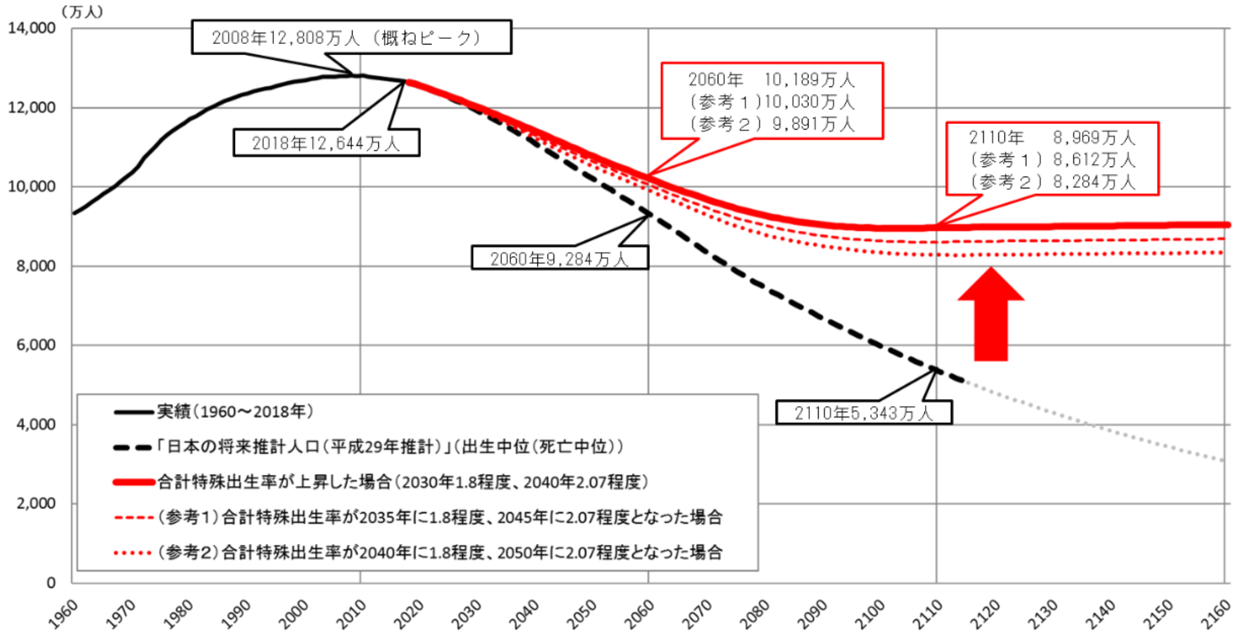
年齢別構成比（現状に準拠する人口推移）

出典：三郷市、「みさと統計書」 ※各年1月1日人口データを使用

（参考）我が国の人口の推移と長期的な見通し

社人研「将来推計人口（平成 29 年推計）」では、このまま人口が推移すると、2060 年の総人口は 9,284 万人にまで落ち込むと推計されています。これは、約 60 年前（1950 年代）の人口規模に逆戻りすることを意味しています。さらに、総人口は 2100 年に 6,000 万人を切った後も、減少が続いていくことになります。

【 国の人口の推移と長期的な見通し 】



出典：内閣府、2019、「まち･ひと･しごと創生長期ビジョン（令和元年改訂版）」

（注1）実績は、総務省「国勢調査」等による（各年 10 月1日現在の人口）。
社人研「日本の将来推計人口（平成 29 年推計）」は出生中位（死亡中位）の仮定による。
2115~2160 年の点線は 2110 年までの仮定等をもとに、まち･ひと･しごと創生本部事務局において、機械的に延長したものである。

（注2）「合計特殊出生率が上昇した場合」は、経済財政諮問会議専門調査会「選択する未来」委員会における人口の将来推計を参考にしながら、合計特殊出生率が 2030 年に 1.8 程度、2040 年に 2.07 程度となった場合について、まち･ひと･しごと創生本部事務局において推計を行ったものである。

（注3）社人研「人口統計資料集 2019」によると、人口置換水準は、2001 年から 2016 年は 2.07 で推移し、2017 年は 2.06 となっている。

令和元年度三郷市版人ロビジョン

発 行　三郷市 令和2年3月

編 集　三郷市企画総務部企画調整課

〒341-8501

埼玉県三郷市花和田 648-1